

柔道ルネッサンススピーチ原稿

実施日

平成 18 年 4 月 9 日(日)

第 29 回全日本女子選抜体重別選手権大会

実施場所

神奈川・横浜文化体育館

実施者

自衛隊体育学校 柔道監督

酒井英幸(さかいひでゆき)

こんにちは。自衛隊体育学校で柔道の監督をしております酒井です。
少し時間を頂いて柔道ルネッサンスについて話をさせていただきます。

「柔道ルネッサンス」とは、講道館および全日本柔道連盟の合同プロジェクトで柔道の原点に立ち返り人間教育と社会貢献を実践していこうという活動です。ではなぜ今現在改めて「柔道ルネッサンス」という活動が必要でクローズアップされているかといいますと柔道が競技偏重主義に陥り、強ければ何でもいい、何をやってもいいという間違えた考えが増えてきているからだと思われます。確かに強いという事は必要で大事な事ではありますが、同時に正しさや優しさ、「仁義礼知信」などの五常の徳というものが人には必要ではないのでしょうか。

それでは「柔道の原点に立ち返り」という事なので原点について少し考えてみたいと思います。

柔道は、皆様ご存じのとおり、明治 15 年に天神真楊流と起倒流という柔術をまとめて嘉納治五郎先生が創設されました。その際、嘉納先生は柔道修行の究極の目的は「自己の完成」と「世の補益」とであると定義づけられたのです。他のスポーツと違う点はここにつきると思います。他のスポーツでは身体や心を鍛える為、楽しむ為などの目的でスポーツをやるわけですが、柔道では更に上の物を目指しているのです。要するに自分を完成させる手段として柔道の稽古で身体と心を鍛え、その鍛えた身体と心を世の中の役に立つよう活用していくという崇高な目的があるのです。それがよく言われる「精力善用」や「自他共栄」の精神や言葉に表れていると思います。このような思想的なすばらしさが土台としてあったからこそ、柔道は広く普及し、賛同者を増やし想像をこえた成長を遂げていったのです。しかし現在では、この大事な徳育が不十分になってきているのではないかと思います。

今の世の中自分さえよければよいという考えが多く、人と人との繋がりが薄くなる事が多いですが、先ほどの柔道の目的に照らし合わせれば、自分だけではなく他の人も同時に栄える為に助け合うという事が必要となってくるのではないのでしょうか。日本人は、古き良き時代の日本人が自然に持っていた、助け合うという和の心とでもいうべき物を忘れかけようとしているのではないかと思います。急成長で発展を遂げた日本という国は和の心抜きには語れないと思います。古い物は何でもいい物とは限りませんが、先人の方達が試行錯誤、苦勞して築いてきた日本の伝統と文化は取捨選択しながら「温故知新」の心を

持って守っていく必要があると思います。人間は一人では生きていけません。同級生や同僚などの友達としての横の繋がり、先輩や上司、先生などとの縦の繋がりなど様々な人と人の繋がりの中で生きているのです。その繋がりを大事にしつつぜひ助け合うという事を実践して頂きたいと思います。いつかは自分が助けられる側にまわるかもしれません。

また「恥を知る」という言葉があります。日本人は元々持っている気質で、昔は「恥」の為に切腹したりした事を考えると現在とは雲泥の差があると思われませんが、あまりにも恥を知らない事が多いのではないかと思います。ゴミや空き缶などを所かまわず捨てる、弁当の食べ殻を所かまわず捨てる、禁煙の場所で平気でたばこをすう、並んでいる列を平気で割り込むなど、道徳と言うよりはあまりに当たり前すぎて「恥」以外の何物でもないと思われれます。そこには自分一人ぐらいという気持ちがあるかもしれないですし、法律で罰せられる事はないかもしれませんが、心の中で人に笑われ馬鹿にされているのです。何事も自分自身の事や当たり前の事をしっかりやるという事から始める必要があると思います。もし心当たりのある方は、日本人の「恥」の文化というのをもう一度考えて頂き、改善して頂きたいと思います。特に柔道の試合会場では弁当の食べ殻が問題となっているようですのでしっかり処分して頂きたいと思いません。

柔道をやっている以上は、柔道の究極の目的である「自己の完成」と「世の補益」を目指さなければなりませんと思います。道なのでゴールはないかもしれませんが、まず実践してみる事と少しでも前進する事が大事だと思います。小さい事でもかまわないので自分自身で無理せず、できる範囲で努力していきましょう。